花玉和歌集

伊地知文庫
文庫20
271

文庫20
271

伊地知氏書冊

藏玉和歌集

草木異名

大根

加賀御菓

年貞紀

正月一日大内より餅のうへにのせて大根を

初代菓　門松

大内やり家山乃初代菓いくとせ人よ世てそうん

正月二日大内より梅松を門松の事

初代菓　松

天智天皇花宴歌

年玉

初代菓草　若菜

京都帝国大学

円
いたくもあらぬ橋ふみ伝ふ岩根の苔　芹

円
せゝらぎの流れて花よ根白草　梅二月中旬の作

香散見草

梅木は品相国こそ須佐院御作

円
山里は物ふさびけるかさみ草色とりそへて淋しさそふる

尋深草　橘

みよしての橋うち出る先よ吹し吉野こそ

元年橘と又丸橘とも云

見ゆく芳野の山のいろこの草花とうしの人よ思ひ出

風見草　柳

あつさうち寒の横ふ風ひん草のうけきこそ絶えなひらん　柳

春薄

円
ちるもの霧よみちゝ寒為横よ秋の風ひんるれ

風吹草

円
松よのこゝ高砂人の風な草糸よ八雲のみそれつゝも

可高草　円

天智天皇花長歌

流よ浜風ハうち野の川こゝ草風の波乃うへよんるうん

吉野院菊花御卿こそ

長見草　橘

円
植ゑ置てとこしへ人の見る草あすをも志るぬ人の命と

化石草　円

月

あさな菓いかなる人の植置てはるる紀世よ散をしるらん

他夢化草　瑞

（無言花尽と云名
ことハ程ゝ之西行山の五向菓美はしむらゝ乃あやの中蓋

五向菓　松

月

山里ハ春をさきはの五向菓花ハなるなるとてなる名ゝ

紅白ことを神ゝ乃ゝ名と御ゝる松の中ゝ

蓮

（天智天皇花尽と云名
一夜菓美さまゝ〳〵いろ〳〵の花となる八ハ海と搦ん

一夜菓

野邊の昔云物語を須徳院御作

むゝ〳〵或人道をゆくふまるひて庶聖に日

と言ゝ〳〵菓のちふくるものをとひろを

ぬ出れを被ふ八て菓の花とゝ引山ひ

てをの秋ハ野ゝよりも思美ふ乃る花日菓

けるゝいを八形生のをなるゝ山野ようゝ

へきゝ〳〵乃て美さ免ぬ美のをくやて

ゝむをはゝ〳〵ふ乃るる菓一つる

菓よ山ゝを紀乃花さゝぬ今ハ蓮ひれ

野よ海ゝひて男又彼美乃る花我方

の型八乃菓美はゝ乃ゝゝふく仲の

型とゆくゆくよゝゝひとゝあるゝ

又名のかゝ可こゝ乃ゝ也とゝて西てゝの

をゝれのなよゝ同ゝ

一葉草　莖

月
金とやりけてをれるむ一葉草月の花のさんらく
山莖と人をしたがいるみてうくるさき
て秋なく拙見　月

二葉草

堀川院花で去名
二葉草今もなりもう人やもうん月紙面兵法花の便り
世ようて彼社頭の莖より山竹を泳ぎ
此心も彼因源を思ん　梅

三間草

元智天皇花たを
大川やあるもむつもうさ三間草家紋すりかけを久くさ
梅と去の如よ入事ハ元日梅葉とさき

て水よ入ら去ようさ
この殿ハむへもとみなりとりなかあるなく

四間草　梅

月
去の時ハ四方も八角もなさもぬ四間草にも花ハ咲ら
八角と八治世のなり

花見草　雪

泉式部泳出去名
去ハくや此よ知り山里沈れるよ花ようけるふむん多
けん

火取草

花さけハ秋ようと思ひうる草ん多ふもうもん花をよまり人
唐

二季鳥

忠琴泳出去名去伏後来物し
行月とあるとてう二季鳥年ふ二てひゆさうくうん

二季草　　茂

寛丹波守
常盤ハ冬も花ともみるを二季草　松よのこまつ　ゆるる名ゆえ

春夏ふかるる事なれハ二季草といへり

紫草　　同

天智天皇御歌
むらさきの紫もゆるかるる草のてこさよ

松見草　　同

同花ハ春夏
ちるやふるふる遅速と言ふ松見草　花ハ咲ケり

御士思草　　花ハ咲ともしらぬ不富

同
みしほ草行ゆく末も代々とへて見やむらし姓花よるるん

御酒古草

同
銀人や千代を送ん御酒古草　齢のかるり せん

三月ハ内裏ニて御菊酒ニ入る所桃なり

二子代草　　西王母ノ桃のすく

同
ふ子ハ酒ニうゑ人てのこ人や二子代草の名をいとふるん

ちらとゆるなるそ人桃のといつるすかるく

日新草

同
程荷て行くまるん天の日ケの高乃花ちるぬまふ

天川原の高代草

山根草　　蕨

同
山根草ちりて山ちのうるるるるるるるを花ちるるるん

山吹

面影草

あるの面影草乃ゆゆ人やとめ一ツ子の名ハなるる

昔男女あり一すじに別れゐる時鏡より面影を手にうつして山境とうつし手とをかゝらう山吹生ひ出ずと云ふ匡細忘衣物語

昔大和国奈良原と云ふ所ある男山城いての里より住女よかゝる所の志賀うつして手より親志りて彼男女云ふ八志雑源物今うい云変不叶と云て鏡と名付て手より面影とうつして若并変おろん時ハ山境とほり名とて云て鏡の下よりうつし後の手紙書山形

ゐる数多生ずゐる男あるしなおて不断此所より独ゐて歌ゐる枕山変と山てゐて鏡とかり出てとうて又うつむ其ゐの嫁ゐる山形ゐる種花生ずゐる時山男ゐて他の心ありとて忘ゐる

と云こ

鏡草

月

面影とうつしかゝ家ゐ衣乃名ゐ

子細同前

初見草　外記

天智天皇花尽

うつを家ゐ山ゐ時ゐ三面の山乃里ゐ記ゐ

同

雪見草　同

ちはやぶる我神なれば雪見草　雪よりてけれ花ハ

塩見草　同

郭公なくやさつきの山里のやど

葵

同

飛見草

吾かりしつてもの咲ぬ花ハかさみ草といハ行といふ

唐乃草　雪をこめて石のとらつてれる

中よりひとを浄好あり崩浄りて沼

よ皇子此草をとるさみ草といい給ふ

同

雪見草　あつち

山ちをとき物をたにうゆ草ハ雪見草ぬる

同

白草

夏草ハ花なき中なもいはよ草ハ白ぬ紫になる

柳子

後撰集出

石竹

庵をよりけるとハいさらを東のかくよ生る石竹

青東をよ島田の時をと云雪ハ行雪

此後ハ一ッの石あり彼石に灵あり人を

なやますいて時を伴の石と射則氣たち

年を経ぬ時て花ハ咲年ハ

拾よりは花ハ咲なりてさくと云

板

夏石菊

天智天皇花ハ

八月の夏花ハ

夏石菊花ハ咲ものとの花ひと

東宮花宴

代々とへて宿荒り青草香となつてこの神まつ　長雄

文四

秋待草

孝後御出

水うけて秋待まのくるゝ草とゝ咲ゆゑ人のかるかも　円

天智天皇花宴

水懸草

とゝ種〜吾四の面より秋待てゝうけまて対面草

蓮

池見草

かけうつむ花やうつゝ池の底彼よりうて紫みて

霧地草　円

ゆきつて霧や降うん霧地草ちぬ雲てうゝ降るゆえよ

水堰草　円

花ちうん波ゝ花ちうん水堰草ちぬ雲ちさみてに咲ゆ山比

庭蛍草

後朝方

九月四やうれと降うん庭蛍草ゆ花の多れ

是八月四の比庭よ来ゆ泉へ

菊

菊草

孝後方

行吉や庭のあちゝ菊草ちぬ雲て人をたこ花て

行吉の庭里に五位の松と云松あり彼ゆ

やゝ〜うて霧〜晩〜てすみ〜行ゆ

つゝとゝ琴弦ちて人〜秋八菊とあひ

〜かゆく人〜彼霧所吉庭へきし

乃松けちて霧うあの花てさゝ

是よりて葛とも弱草と申之
松の異名と承知ニ候入事不得ニ候但彼
雑抄ニ夏八月之頃長ニ秋ニ入今夏松
後撰集ト 仮名のはわりと思ふる弱葉菓
ゆく秋の風にやゆらん イヽテン

氷室草　葦

天暦天皇花合
難波江のわらはいふる水室葉代々のまとかふかうるもの

吹喜草　菖蒲

万葉
大内山の野てあやめ草かほくのみ世よひかれてるこし
あやめ草の下浪古今後拾色葉ヒ下かのり

光草　姫百合

万
夜のよしふかはにかゆけ花よたとへひかり草なる
是と姫ゆりと見つる事ハ可然蛍ハ火借
草之所をとんて書乃ちをとりて同事と
云徹事之

火借草　蛍

万
夜ともし川せの波乃火借草月行よそてかまひちもの
是ハ蛍の名よりしつる草也

夜生草　月

よつゆ草ろん川の夕景ふかけのおまそ月出よきり

不加見草

万
名斗ハききてし草れ如ニ君花の跡をはいそそんくはし

此花の咲日数は仍て日草と号

且見草　まこも

みちのくのあさかの山に生禁なる浅香の沼乃且見草

名取草　牡丹

わが人の心なるとも名取草すくなくとすくなくとも

むしわる女山花とあひして花ゆえ

こそ色は侍日よりなれ雲〳〵夜絶秋風

よ所捜ゆえ欲なるよりて男他心あり

とて離別し　名取草きらく〳〵きひろき

てりもの乃ちくすみけりとなん仍名取草と

号

夜白草　大豆

天智天皇花也

豆の葉小雪ふる夜ふるとも夜白草のまもなく

ちれと牡丹しるし証あり大よ石害以所所

ろ簡

小菊草　大菊草

いと菊いろ〳〵の風よりあひけるも花ゆえ

散て埋草　小菊草

秋なれと風ふるらんさらぬ草もの乃ちなとたくし水月白

深雪草　杉凡

明暁を山の雪ふきこめ深雪草の風乃夕ぐれ

乃到草

てるれ菓人のうるはしよるるは後のたゝねけとわをうし

風珍草

直房卿

ゆうてきうれしやるの風称菓てるる神よ月をいてまし

風字草

無名花尽

とゝはるまし行の咲るん風字菓多くよんるる神の月菓

光ハ風副菓を風字菓石切心

萩

秋

天智天皇花尽

りゝるるて家と色行る初見菓世るの夜代萩とな人い

初見菓

同

垣根よハあさるゆるる庭人菓ゆよ立ゆる人のとさよ

古枝草

同

西行法

こゝ東野屋藤毋るゆる古枝菓てゝ純嫁と花ハ咲ゆ

秋生草

同

秋ら菓るゝむさけるこの世よハゝゝの藤をゝゝね牛ハ

江漆菓

同

舟ゝゝむ尽

花ゝけん沈まなゝ人もこゝゝゆ菓色にめてるゝる沼ん

ゝ金花尽

藤書草

薄

秋宿乃屋てゝゝ行ゝ菓かゝゝる人ゝゝれるゆゝん

藤

紫式部内侍

初菓島

ゝゝれ中ゝ中ゝるゝゝゝの衣ゝてゝ沼ん

天智天皇花尽

藤岩草

萩

ゝゝ純のゝてゝ家や菓ゝゝ人乃中の花の神ゝも

萩の露　と題合心更此萩萩を

萩

秋知草

後成

秋知草

秋知草は風なりや老の秋の月毛を

山下草

円

夕暮の山下草の山おろしよ松ふきまする嵐はさびしさ

風持草

命を花を

なをしら波のよせくる浦吉八空海にて風持草を詠ぬ

男草

城川院男草会

男草

男草のたりはたえぬなさけよ

秋花草

秋花草

姫しいへるいろいろも秋花草風の美路の関なん

同連草

二条院讃岐

同連草

君伝のうきおもすの四世の男神よ八雲とさうしなりうう

讃岐同世の草と詠年　磯屋と云ものよ萩

と同草と詠ける　と見て詠る由須磨院

女房詠也

濃露草

天智天皇花会

濃露草

花の名乃ゑ秋乃中よ濃露草金秋ろしゆる落る露

八月中旬ゑ秋乃中　中旬と被定事草木

世古相国記　沖撰と云

色変草

松

色変草

色変草は紅葉の色の草かりうの色の草は秋の弘

[illegible]くさと号て秋の部より被入事者
[illegible]と秋合後[illegible]時三四[illegible]
[illegible]色[illegible]秋の事とさくらん後[illegible]
山何[illegible]入

壺菫草　作者

春[illegible]れハ花[illegible]秋[illegible]の[illegible]ハ[illegible]秋[illegible]ハ[illegible]

芭蕉

[illegible]の[illegible]草花ハ[illegible]

雅

夕[illegible]草

[illegible]ハ[illegible]草[illegible]ハ[illegible]

同

鏡草

[illegible]後[illegible]

[illegible]

女郎花

思草

[illegible]の原の思草[illegible]花ハ[illegible]

山田[illegible]

女郎花[illegible]草[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ふ[illegible]天智[illegible]草花[illegible]

[illegible]ハ[illegible]又[illegible]ハ[illegible]但

[illegible]草[illegible]

[illegible]彼[illegible]載合[illegible]

[illegible]

[illegible]草

華

[illegible]

[illegible]草より花さく草と云草ひとり秋なる二もらの比
わとれ草の事ふせる草伊吾[illegible]
くふせるもいとひ又くりさくを草草
いとまる後れ八稀なるもの也

私曲　後れ老て身のうれとなる草
風ふきらくハ命あるかぎり

お葉

色見草　須磨浦
[illegible]

妻恋草　同

[illegible]

錦草　同

立田草　菊

[illegible]

百秋草

[illegible]

大和国之物語よ老翁ありけるよりの
菊と植くハ山家ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

水懸草　[illegible]

七月五日長水

[illegible]

星見草　菊

屋満よりてふ色ゑりて[illegible]

七月十日水し

白水

今日とい[illegible]

夕玉草　行雲

月のきく夕玉草の秋風よ[illegible]

川玉草　作

[illegible]

[illegible]　落

水ハ[illegible]

菊

[illegible]

新[illegible]

菊[illegible]

物[illegible]

冬菊

初見草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　第蓮

夜のほとゝは萩の三枝乃初尾花ともみし
姑乃色も好みし　彰政

霜見草　同

いく代へし松の木かけ乃霜見草と人の時をしらぬ志る様く

雪見草　同

兼好
志られしとふかくぬるやさきの雪見草姑よわかれてしぞ悲しき

秋草　同

天智天皇花冬
花ちりてそのかへりに秋草をかるみふをけり今の霜ぞ

初名草　冬梅　小野よわり

同
万代にさける中にも初名草志ばし咲きそや花とこそみん

鏡草　浮草

波さへも川にながれて葉水のなかとも純水の花の名

氷面鏡

日のかけに水のこほれるをいふ水の面

名くし賀茂川にありしと詠せし歌

未及見

親子草　志つ又ハ忍川の葉

年ごとに比比たつる親子草人に志らしきく人や知らん

六花　雪

師光行
冬氣にやかれてちる六花の毛みち袖にも雪乃かゝれく

六花の事委和合新論折にみえ後房作

春に二梅桜　冬に則ち冬雪

秋よ一菊　夏外花書ありといへども

反言の中伝為山事六花よハ不入

雜　豊長合草　松

天宿天皇花屋

川上ときこえて行る宿のとさハ秋ハ雨も友なきときよりあ

豊子代草　月

松のこゑ人多時を共よ世事久〳〵紀若乃屋〻ふれ侍て

延喜草

春のゝ書家代ハのひさまも秋花ハ雪よを宿て

夕見草

松よ雨れてとに世侍夕見秋月ふきよひの花とみゆ

朝見草

秋よあまの月とゝ山のあさこゝ秋すこゝ秋のこゑ秋の曙　月

折見草

ゝ山家松ゝあんとに世なくさみかほさ今日の夕雲　月

時見草

なりあて花とみとを時見秋月家なり代世を悔と月人と　月

物見草

和見草神ゝうゝむ秋〳〵よ波をなるも花とたと人と　月

月見草

山里代曙とに松風やめこ酒〳〵秋乃稀となるゝ

寝覚草

行とゝて稀とハのん孫芭蕉公の分よゝ枝七なし

恵草

かるかやあるいは岡草の種とハ他の國なるべし

岡連草

月なるそうねんの記岡連草むかしより様あり世人

元草といふ事一説ふかきに或ハ

こくさ或いしあれ草なるといひて物の

種となるものとこれ皆草といふ文字とこ

れと近年発角尺てやおとるひ

う事しるべし

異名

吉野草 桜川慶長名 白草 梅月

河ひし草 柳 龍田草 楓月 富草 楓月 曙草 楓月 文見草 楓月 玉見草 稲月 富草 稲月

川柳草 月月 雲草 月松 常盤草 月松 葉草 月月 うさく草 月月 風国草 月月

日ぐさ草

章作抄にあるとうつくしの小田の秋ぬさて富草ハさくさくつむと

神代の稲の名方神の沖田あるまの田となる田よ

りさのをなるあまのぬれさほとく明化を時稲

濃名あまのをしまかくはハせともをとをを

稲のて飯よりあとをそ

たとゝれ草　久部原牛　志のゝめ草　雉　月

ふゝれ草　月月為　武蔵草　鶏　月

ふゝひ草　月月　はてゝ草　月月

契草　月月　所思の青色法よりあり

むゝ一法眞よりえ貫あるもの世よりあひわ

ひて分ハ筋筆へ行々り一ハ名ハを指

別当る時　えをたちの筆と一ハと二よ

わけ法ゝ立ゝ　むゝ立ハ筆よりは筆と

ふゝくなるゝ心へゝといひゝ分筋筆

へとゝらゝて下面ゝてけゝ筋ゝ

山

山筆二よふゝまたいつとゝ筋ゝ

よ花さひゝとゝん

ふゝ鳥　雑四鳥　鵜鳥　時鳥　堀川院長歌

青羽鳥　月鶏　なゝ鳥　月鳥　男鹿　長流抄　ゝ月ノトゝ

流ゝさゝ鳥　月月ハ月ヤ　ゝゝ鳥　月鳥

日ゝ沢　日ゝ記　ゝゝ小鳥　郭公　角家抄

ふゝなゝゝゝ鳥　みさこ　長流抄　ゝゝゝ

こ舞鳥　鳥　能兼記　猿笑鳥　月鶏　堀川院

小花鳥　月鶏　ゝゝ海士　月　水出　月猪

ちゝく鳥　ゝゝ　ゝゝし　長抄　細の志　月魚　月海士

のゝこ人

蓬莱姫　曙女の神のうたとさうし　日本紀

むきたこの神の子　花鳥記

世の川　彼岸　真言抄

桂の上人　イユノ変し　神代の譜より

きしとかしらるゝすゝ人乃ふくゝふ神とゆとうらけて

かさくあはは　彼岸と云ふ　日本紀

かさくあるゝ神のとつけたかもるゝ音書ちねく人公見

あさくらの　八十七夜　電傳抄　さはさ川よ　八十八夜　三蔵の名　三蔵とうり

ふくゝ　公はなぬり　苦さうみ　ほ　歌　歌集

凡夫　沖の石とうつし

天下くらむ神のさそるれり桂さけよ

うゝ之うの月の高ゝ桂けとふらの子

ゝり七夕月の高ゝとハ者しぬゝね

衣之仙人の衣ハぬゝね抜

きゝ　貝の名　くゝとハ貝なこをくさ　のゆてとくをつし

ちくうおくく舟　之漕と云ふし

かゝる

鶴胡　鶴胡と云ふのうゝ毛乃ねよち

ゝ之ゝ毛乃ゝ紅とハ

鶴胡ゝ云ふ毛ハさむゝりをするゝの神の

まゝよるれゝ乃ちとせおりよ

かゝて言葉の音とゆせくゝ伝ふ

鳴音すうくさひくゝゝ　ゝ　ゝ

ゝと云伝あり

きさらく海さ　ちさの海さ　ちいのうさと
ちさなこと　ちひさ　きすと云貝のわるく
常の袖　ちさきぬいろ衣の袖し　東わ袖を
いふ用衣のやし
むかさく　常　かなて　あしのわ葉乃ちい
こうつのくいしをうく
さいひこす　さいこを行く山里乃
まものうふりつよとうてれう
かく袖　竹の葉
ちもにうかりさうくうらうあまをすなをうかりつ
くきしあとはるの毛とまよ

蔵の葉　單初又毎を一字ぬ　ここて海老　ぬしの毛とよ
そうそう　ちさうそうわうさ　ちさの葉乃袖
ちあ葉の袖　ちさ山乃ちつこうりよ生よりすきな
おもあと　留　きしらの袖くしし
ちかう　稲葉乃中　天の川　七夕乃天の川海稲六首歌　ちりし風葉ぬ
ちかうそ　冬の月　ちふひつ　勝
袖やる月　友乾　あさきり　青乾
ちまか　月　わくなよ　恋乾

うきこのむ

[illegible] 新を [illegible]

あつ[illegible]雪

山人 仙人

梅つき花 冬梅

里舟 車

石便 [illegible]

[illegible] 箏

心の使 [illegible]

[illegible] 塩

一筆書 桐

[illegible] 法名

こやさ 古堂 大和物語

[illegible]雪 [illegible]

[illegible]人 塩 華蓋

[illegible] 車

波車 [illegible] 大和物語

[illegible] 紅日

[illegible] 月

[illegible]人 [illegible]

[illegible]

十二月異名

[illegible]月号名[illegible]

[illegible]時[illegible]付花[illegible]

[illegible]

正 柳営 初霜月 霜降初月 初春月 御鏡

雪[illegible]

今日[illegible]

[illegible]月 [illegible]

二月 雜 梅見月　小草生月　衣更月

有家

ちとせもなさ故に梅見月風の情と神よしるらん

弘忠

緑なりけり色あさ小草生月結ぶ心さ[illegible]

[illegible]姫の[illegible]より衣更着なりさ日数も山月と志る

三位 雲雀　花見月　稚月　春惜月

御製

ふる里に[illegible]ひとり月見てなもあくれぬる

宗家

[illegible]て今宵[illegible]て稚月ふす昌ふり時る雲井の

家隆

物[illegible]も思ひ[illegible]日とかはね[illegible]情ふ月

元亨二月のうち[illegible]月と志と号

四位 郭公　卯花月　得鳥羽月　花殘月

伝明

ふるさと今もなほ時鳥月よ[illegible]

有家

花見月よりかれるかくふるの下に結ん[illegible]羽の月

御製

[illegible]て志の[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]月

五 柄水鈴 賤男深月 月不見月 槍月

吹喜月

いくとしてゝ苔の小松をこゝてゆゝしきつまを九月の夜の比

宗家

八月夜のちゝろもみてゝ秋の空ちゝろ月こゝすゝ月こゝ

右衛門

さもぬらす柄月ぬるとゝあてゝ志の音のこゝひこゝろん

光明

潜初月の海も吹来月ぬれあり明くよゝちゝろこゝなけ

六 若女物 風待月 明電月 常夏月

杜鵑の家居をこゝ行こゝふこゝ風待月の夜ぬけとさよ

右顕昭

定家

夜毎ハ秋こゝれゝてゝ月ぬ成ぬこゝろこゝ

御製

ちゝろこゝいもふこゝん花夜の月待こゝ花のさゝと

七 女郎花物 文披月

女郎花月

青家

七夕ぬ夜の夜ぬけみてゝ書こゝ人こゝ文ひこゝけ月

家隆

こゝ紀のこゝ月の柄ゝ四こゝ七夕月の時こゝ

七夕月　雅眼

八　秋風月　紅葉月　月見月　宣長

萩の葉に露ぬきとめすゝきの穂に月にうつる秋風の月　長明

名にしおはゞ秋の中なる月を見ん　月見

志ら月のかゝる時とぞ紅葉して紅葉の月ぞ名に

九　菊月　紅葉月　小田刈月　稲葉月

秋ゝ月のゝ月ぞ名に

立田山まつ〻ゝ紅葉して紅葉の月の色ぞ

雅昭

さしのぼる八時ゝ月の露ぬきけゝ神ゝ月ゝ小田刈の月

家隆

いゝ家ゝ月ゝ秋の稲ゝ月秋よりはゝ

十　菊月　時雨月　十月　神無月　宣長

ちゝ〻ゝ木葉の時雨月色ぬゝ月色ぬゝ

雅昭

秋の色ゝ月ゝ捨月ゝ

長明

東西南北に神無月の約束けなからもゆき北へ乃をさる

十一（りうたん 子月） 霜月 神楽月 雪見月

御製

風さえて霜ふり月は更るよや霜気とみえて思ひしらるらん

定家

しくれせて冬の木の葉の神楽月之榊葉の色のさやけさ

貫之

今朝消えし窓の雪に雪見月けさてそ冬の志賀のみなれ

十二（梅 臘） 春待月 梅初月 三冬月

長明

暮ての年ハ兄よるふ老かれと春待月のいそくしらる

顕昭

むかしをはつかむ梅さくほのみえて梅さく月ハ色めく

定家

春あける時ありとみえて三冬月いそふはやしに雪のとけさ

冬三月の中に此月を冬と号

諸月異名雖之多此詠歌異名者自日本紀并万葉集勘出也可秘々々自余者皆以證歌不分明々々

美術書肆
柏林社書店
東京都文京区森川町2
電話 (921) 5445

此一卷者自宮所殿草本異名事俗被
尋申被註進清書之時密〻寫留者〻
二条殿摂政良基公

享保二十年冬清海老所寫之